会　報　39　　白鷹町史談会

史　　談

2015（H27）　　５．２７

■　平成２７年度総会のお知らせ

平成 27 年度の総会を下記のように開催いたします。会員の皆様の御参加をよろしくお願いします。

１　日時
平成 27 年 6 月 13 日（土）午後 1 時 30 分～

２　場所
白鷹町荒砥甲　　白鷹町中央公民館

３　内容
(1) 平成 26 年度事業報告、収支決算報告
(2) 平成 27 年度事業計画案、収支予算案
(3) その他

４　研修会
「芳賀秀次郎先生から学ぶこと」
本会会員　関千鶴子氏
※本年は、白鷹町蚕桑出身の詩人、教育者の芳賀秀次郎氏の生誕 100 周年になっています。それで有志の方が様々なイベントを企画しているようです。今回は「芳賀秀次郎生誕 100 周年を記念する会」の一員でもある関さんからお話をしていただきます。

■　榧（カヤ）の実を食う

丸川二男

あちこちの年寄りの話を聞いていると、昔、カヤの実を食べた話が出てくる。たいていはうまかったというし、中にはアーモンドのような味がしたという人もいる。一方、ほかに食うものがなかったせいだろう、という人もいる。

カヤの木は針葉樹で、葉は硬くて先がとがっているので触れるだけでも痛い。材質は緻密で硬く、碁盤や将棋盤の材料としてよく知られている。太いものはなかなか見られず、福島あたりが北限というが、このあたりでも旧家の庭先にあったりする。上に伸びるものと横に広がるものがあるというが、この地域のものはたいてい上に伸び、なかなか太くはならないという。実は薬効があるほかに、土俵の鎮め物として、米、塩、スルメ、昆布、栗と共に中央の穴にうめられているという。そのいわれはこの実が花の咲いた翌年になるという説明とあわせてよくわからない。

かつて山際の中川巳之助さんの北側にあったというカヤの木は、今は形もないが「二反カヤ」として知られ、二反歩にも広がっていたという名木であった。大正三年十月に当時の蚕桑村から西置賜郡役所に届けられた記録には「野際榧山口滝の沢口　周囲６００坪　所有者中川巳之助」とあるという。また後に作られた地元の絵はがきの一枚にもなっている。その昔、この木から拾われたカヤの実は、なんと毎年五升を米沢藩に献上されていたというから驚きである。近郷の人からも「温まり」の薬として所望されたというのだが、昔はそれだけいわゆる「小便むぐし」が多かったということになろうか。いつの頃かは不明だが、カヤの実は「山盛り一升、米一升」といわれたという。

そうした話をたびたび耳にはするが、実際にその実を口にしたことがないのでは話にならない。なんとか機会をとらえて・・・と思っていたら今年は「なり年」というか、大量に実をつけていた。今では邪魔にこそされ、実を拾って食う人はほとんどいない。大体、一般の人はカヤの木がわからないし、落ちた実をどうやって食べるのかがわからないのである。中には「煮て食う」などという人もいるほどである。もっとも昔うまくて食ったという年寄りも、子どもの頃に食べたとはいうものの、その工程をくわしく知っている人はすでに少数である。

拾い集めることは簡単だが、後の始末を考えるとやはり落ちた実が青いうちに拾えば、皮をむくのに手間が省ける。落ちてから日がたって乾びると、水につけて措いてもなかなか皮がむけないからである。また油分が手についてべたつくので、そのつど石鹸で洗うほどである。臭いは松脂のようで、さほどではないだろう。

さて、これを乾してもまだ渋くて口にはでき

ない。さらにこれを灰汁に十日間ほどつけておき、それから洗って乾燥させた後に、よく炒る

というという具合で、なんとも手間のかかることである。この実を粉にして「コウセン」として食するということを読んだことがある。米沢藩の『かてもの』だったろうか。虫下しにも効果があるという話を聞いたこともあった。

それにしても木の実としては大きくはないこのものを、まずは一個ずつ根気よく拾うという作業があっての後の作業である。口にする時の一個の木の実も、そこまでに至る手間と時間を考えると間尺に合うものではなさそうである。とすればやはり「温まりの薬」という効果を信ずればこその行為なのだろうか。とうてい今の人の感覚ではないが「溺れる者藁をもつかむ」というから、わが子の寝小便を直したいという親心が、カヤの実を世間に知らしめたとも言えそうである。

■　「キリハライ」のこと

守谷英一

「キリハライ」（漢字で書くと「切り祓い」となるようである）は、米沢地方で正月飾りとして神棚に貼る切り紙である。

こんなふうに説明を書いているが、実は、私がそれを知ったのは３月にあった置賜民俗学会の役員会の時で、それまでは見たことも聞いたことがなかった。

米沢市上小菅一宮神社のキリハライ
（村山民俗学会　野口一雄氏提供）

白鷹町の文化財保護審議会があったときに、委員である舩山義彦さん（鮎貝八幡宮宮司）に白鷹町にはないかと伺ったらないといわれた。不思議に思って、いろいろ調べてみると、同じような習俗は福島県、宮城県、岩手県の海岸沿いを中心に分布していた。これらのものは様々な形のものがあって、宮城の正月飾り刊行会が、2003 年に日貿出版社から出版した『伝承切り紙祈りのかたち』という本によると、米沢のものは、「切り透かし形式」というものに分類されるようである。

実際に神棚に貼られているものがみたいと思い、置賜民俗学会の梅津幸保会長さんと米沢市小野川の今七兵衛さんのお宅を訪問した。下の写真が今さんの家の神棚である。

米沢市小野川今七兵衛さんの神棚のキリハライ

今さんの家では、今はやめてしまったが数年前まで、大晦日に新しいキリハライを前年のものの上に重ねて貼って新年を迎える準備をしたそうである。

さらに、高畠町にもあるということで弁天酒造さんのものも見せていただいた。

高畠町糠野目弁天酒造さんの神棚のキリハライ

キリハライは、川西町や飯豊町にもあったという。何とも興味深いことである。

そのようなことをしていたので、置賜民俗学会の総会・研修会で調査報告をすることになった。下記の日程で開催されるので、お時間がありましたら是非おいでください。

置賜民俗学会研究集会
　キリハライ
　　～新しい年に祈りを込める切り紙飾り～
　日時　2015 年 6 月 28 日（日）14:00～
　場所　米沢市　伝国の杜　第 1，2 会議室
　参加費　500 円
　会員以外の方も参加いただけます。
　問い合わせ・参加申し込み
　置賜民俗学会会長
　　梅津幸保（うめつ　ゆきやす）
　　０２３８－２８－５０３６
　　０８０－３１９０－９５８４
　　6 月 20 日(土)　締め切り